



TITLE:

ムラサキオカヤドカリ(甲殻類, 異尾類)の和歌山県白浜町海岸での放仔記録(続報)

AUTHOR(S):

久保田, 信

CITATION:

久保田, 信. ムラサキオカヤドカリ(甲殻類, 異尾類)の和歌山県白浜町海岸での放仔記録(続報). 日本生物地理学会会報 2014, 69: 207-208

ISSUE DATE:

2014-12-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/193048>

RIGHT:

© 2014 日本生物地理学会

Bull. biogeogr. Soc. Japan
69, 207–208, Dec. 20, 2014

日本生物地理学会会報
第69巻平成26年12月20日

ムラサキオカヤドカリ（甲殻類，異尾類）の和歌山県 白浜町海岸での放仔記録（続報）

久保田 信

〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町 459
京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所

Records of *Coenobita purpureus* (Crustacea, Anomura) that released larvae at a coast of Shirahama, Wakayama, Japan (continued report)

Shin Kubota

Seto Marine Biological Laboratory, Field Science Education and Research Center, Kyoto University, 459
Shirahama, Nishimuro, Wakayama, 649-2211 Japan

Abstract. In summer of 2014, number of individuals of *Coenobita purpureus* that released larvae at a coast of Shirahama, Wakayama Prefecture, Honshu, Japan was counted daily during the period between July 1 and August 25. Such a reproductive behavior was observed in a small number of individuals (maximal 3 ind./night) in only eight days during the period (in a total of 26 days the number could be counted). Combining with the results obtained in the last year, release of larvae of the present species may not be contributed to increase of the population in this area.

Key words: behavior, *Coenobita*, reproduction, Wakayama

（要約）

2014年夏季（7月1日–8月25日）、和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所“南浜”で、ムラサキオカヤドカリが放仔した個体数を調査した。その結果、悪天候の日が多かったことも影響し、期間中観察可能だった計26日中のわずか8日でこの繁殖行動が確認され、1夜に最多で3個体だった。今年と昨年の結果と併せても、当該区域での本種の再生産は少なく、幼生が放出されても個体群は増殖しないだろう。

はじめに

世界のオカヤドカリ類15種の内、ムラサキオカヤドカリ *Coenobita purpureus* Stimpson が2011年8月に和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所“南浜”の波打ち際に放仔行動を見せた事が本州で初めて観察された（久

保田，2011）。2013年7–8月の本種の出現と放仔のピーク時に、この行動を行っている個体数を瀬戸臨海実験所周辺海域で放仔の唯一の確認場所である上記の区域でカウントした（久保田，2013a, b）。本続報では、本種の再生産につながる放仔行動が2014年の出現ピークである夏期に、どれくらい実施されているのか精査し、

*連絡先 (Corresponding author): kubota.shin.5e@kyoto-u.ac.jp

ムラサキオカヤドカリの和歌山県での放仔記録（続報）

前回の 2013 年に計 20 日間実施した調査結果と比較した。

材料と方法

2014 年 7 月 1 日から 8 月 25 日までの期間中、和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所“南浜”（全長 240 m）の西部区域である不動明王の前浜を調査区域とし（水平距離 37 m、浜の陸側端から大潮満潮時の波打ち際までの最短距離約 15 m：図 1）、ムラサキオカヤドカリの海岸でのはい跡数から放仔個体数を調べた。毎回、早朝に前夜からの出現個体数を満潮線まで続くはい跡を数えて調べた。前回と同様、波打ち際まで行かず途中で引き返しているものは数に含めず、実際数は往復しているもので、その半数を放仔個体数とした。なお、オカヤドカリ類は国指定の天然記念物なので、調査は県と町の許可（指令文第 120 の(3)）を得て行った。



図 1. ムラサキオカヤドカリの放仔個体の調査区域（和歌山県白浜町所在の京都大学瀬戸臨海実験所“南浜”の西部に位置する不動明王（写真中央よりやや右）の前浜）

結果と考察

今回の 60 日間の調査期間中で結果が得られたのはその約半分の 26 日間で、台風時や夜間降雨時の後にははい跡は全く判別できなかった。2013 年夏季に実施した連続 20 日間にわたる調

査結果と同様に、それから丁度一年後の今回も、ごく少数のムラサキオカヤドカリしか放仔しなかった。今回、放仔は 7 月 17 日に初めて確認され、それ以降は放仔が実行され、最多で一夜に 3 個体（7 月 27 日）だった。また、放仔が見られた日は、計 26 日間の内でわずか次の 8 日間であった：7 月は 17 日、18 日、21 日、27 日、28 日；8 月は 19 日、20 日、21 日。気象の悪条件時（台風が調査期間中に 3 回接近したことや夜間の強い降雨）に放仔行動を起こすことは恐らくないと推察される。また、放仔行動と月のみちかけや潮位（気象庁潮位表参照）も前回同様に無関係であった。

前回と今回の結果を併せても、ムラサキオカヤドカリの再生産は当該区域では限られた数でしか実行されておらず、“南浜”の他の広い区域や“北浜”全体でも実行された跡が全く無いことから、幼生の放出は無効分散（朝倉, 2004; 小宅・藤川, 2009）になっているものと推察される。

引用文献

- 朝倉 彰. 2004. ヤドカリ類の分類学, 最近の話題—オカヤドカリ科. 海洋と生物, **26**(1): 83-89.
- 小宅昭樹・藤川知之. 2009. 相模湾真鶴岬におけるオカヤドカリ属の観察記録について. 神奈川自然誌資料, (30): 55-64.
- 久保田 信. 2011. ムラサキオカヤドカリ（甲殻類、異尾類）の海岸での本州初の幼生の放出の確認. 日本生物地理学会会報, **66**: 253-256.
- , 2013a. オカヤドカリ類（甲殻類）の和歌山県白浜町臨海への 2013 年の出現. 南紀生物, **56**(1): 40-41.
- , 2013b. ムラサキオカヤドカリ（甲殻類、異尾類）の和歌山県白浜町海岸での幼生放出記録. 日本生物地理学会会報, **68**: 121-123.

（2014 年 9 月 21 日受領, 2014 年 10 月 9 日受理）